

『方便から眞実へ　浄土真宗』より抜粋

239 方便と眞実とは、何によつて、どこで区別するのですか。

解説＝方便とは、凡夫の根機に応じて説法されたもので、方法便宜の説法、平等一味の世界に誘導せんがための、調機誘引のための説法であります。眞実とは、如來の真意を頗す説法であります。聖人は真仏土巻に、「真仮を知らざるによりて如來広大の恩徳を迷失する」といわれ。「歎異鈔」には、おほよそ聖教には、真実權仮ともにあひまじはり候ふなり、權をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちいるこそ聖人の御本意にて候へ」とあり、「愚禿鈔」には、「ひそかに觀經の三心往生を案ずれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり、大經の三信に帰せしめんがためなり、諸機を勧誘して三信に通入せしめんと欲ふなり」、御本典でも聞損の機が第十九願、第二十願の機だから誘導して第十八願に通入せんがためであり、三經往生文類がそのとおりであり、和讃が、

念佛成仏これ真宗

万行諸善これ仮門

権実真仮をわかずして 自然の淨土をえぞしらぬ

聖道権仮の方便に

衆生ひさしくとどまりて

諸有に流転の身とぞなる

悲願の一乗帰命せよ

大聖おのおののもうともに

凡愚底下のつみびとを

逆惡もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり

方便とは、眞實に通入せしめんがための方便であつて、この意味を知らずに第十八願の

真似をしていても、それは贋物であつて、鍍金であつて、臨終にはみな剥げるのであります。

方便とは、感情が法に調子を合わせていてあります。真実とは、実機が名号と一体になつたことあります。

方便とは、機を包んで法の尊高を眺めている桁であり、真実とは、照らしだされた逆謗の機が摄取された大自覚を得た桁であります。

方便とは、いつとはなしにいたいたつもりの桁であり、真実とは、地獄一定が極楽一定に飛び上がって喜ぶ桁であります。

方便とは、信前も信後もわからず、ただ素直に喜んでいる桁であり、真実とは、願力の不思議に貫かれ、若不生者に生かされた桁であります。

方便とは、若存若亡の桁であり、真実とは、決定往生の桁であります。

方便とは、方便を方便と知らない桁であり、真実とは眞仮の分際を鮮やかに諦得さしていた

だいたい柾けたであります。

方便ほうべんとは、成就文じょうじゅぶんを読んで理解りかいし、なるほどと承知しようちした柾けたであり、眞実しんじつとは、開発かいはつして成就じょうじゅ文もんが自分のものになつた人ひとであります。

釈尊の出世本懷しゃくそんしゅつせほんがいが自分の出世本懷じぶんしゅつせほんがいになつた人ひとでなければ、攝取せつしゅされてはいません。後生ごじょうが氣にからぬ人、苦にならない人は、後生ひどいじが一大事いちだいじになつていない人ひとです。噴き出る煩惱ぼんのうに驚いた私は、死んでお助けでは満足まんぞくできず、今の苦惱くのうを、いま晴らしてくださいざる知識ちしきはないか、論註には晴れて満足まんぞくができると書いてあるではないか、和讚わさんには、

無碍光如來の名号むげこうにょらいみょうごうと
かの光明智相こうみょうちそうとは

無明長夜の闇あんを破はし
衆生の志願しがんをみてたまふ

と書いてあるではないか。書いてある以上いじょうは、晴れて満足まんぞくされた方かたがあるのではないか。ど

うしたら晴れるのだ、どうしたら満足ができるのだと必死になり、いづれの行も及び難き身なればとも地獄は一定住家ぞかし、三千世界のものはみな助かつても、私ひとりは助からないのだと往生の望みが絶えたとき、無間のどん底から生え抜きの悪性を、我能く汝を護らんの仏智の不思議が貫いたとき、無条件の救済とはこのことかと天地に轟く大慶喜、その初起の一念を「歎異鈔」では「弥陀の誓願不思議に助けられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛もうさんとおもいたつ心のおころとき（聞即信の一念）すなわち（同時に）摄取不捨の利益にあづけしめたまうなり」と仰せられたのであります。

その一念の内容を開いてみせたのが一種深心であります。墮ちるものをお助けと知ったのは合点したのですから、方便の柄にいるのです。実地に往生の望みが絶えて墮ちたときが、信機であり、それが助かつたときが信法であります。そんなことが凡夫にできるものかと思つておらるるのが、方便の柄にいるのです。真剣に求道しなさい、私が苦抜けしたのです

から、あなたができない筈がありません。たとい法然上人にはすかされまいらせて念佛して地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候と大満足を得たのが眞實に生かされたのであります。この方便と眞實の水際の立たない人は、攝取されていないのでから、方便と眞實との区別は、信一念の体験のない人は方便の柎にいる人であります。方便を方便と知らないのは、眞實に入つていらない証拠であります。

『隨想録』より

42 真仮の分際

真仮の分際とは、それは弥陀の本願を源とし、三經の上に流れ七祖の上から聖人様まで流れているのだから、信前信後の水際の立たない人にはこの味は判らず、真仮の分際を諦得された人でなれば、報化二土なんて学問としてしか扱えないのだ。眞實と方便との区別の

つかぬ人には真実の信は体験されていないので。

方便を知らない人には真実は判らず、真実を知らないお人には方便は判らないのだ。道俗よ、名号を称え喜べば皆他力の行者のように思つてはならないぞ。専修の行者のように自惚れていてはならないぞ。

弥陀の本願の上に第十八願は随自意の他力、第十九願は隨他意の自力、第二十願は隨他意の半自力半他力。親様は第十八願の純他力で救うのが真意であるけれども、衆生は一朝一夕では自力の機執が捨たらないから、第十九願の修諸功德の自力の善根を誓い、更に善根の総体たる第二十願の植諸德本に誘導して本願海に歸入せしめんと、半自力半他力を説かれたものであるから、三願転入は真仮の分際を明瞭にしなければ真意は顯れないのだ。真実方便を甄別しなければ、仮智は隠蔽さるる事になるのだ。その結果が報化二土に弁立さるるのだから、三願の真仮をしらなければ報化の二土も判らないのだ。

三願を開設されたのが三部經なのだから釈尊に隱顯の説の有るのは当然なのだ。十九願を觀經、二十願を小經、十八願を大經に演説して、自力より半自力半他力、又それより純他力まで誘引し、大經に胎化段を顯して十九願を以疑惑心修諸功德、二十願を疑惑不信然猶信罪福修習善本と、二願には疑惑の二文字を冠らして胎生の厄を免れずとし、十八願は明信仮智と説いて化生の益を獲ると 明らかに報化二土を区別しておらるるのだ。

南天は易行品に「若し人善根を種て疑えば則ち華開けず 信心清淨なれば華開いて仏を見たてまつる」と仰せられてあるが、若し人とは十方衆生、種善根とは十九願の人は修諸功德、二十願の人は植諸德本、十八願の人は乃至十念と見るのだ。前二者は疑えば華開けず、後者は華開いて仏を見奉るだから、原因が違うから結果が違つてくるのだ。

北天の普共諸衆生を雁門は下々品と判じ、一方には称名破満を顯し、又一方には称名憶念すれども無明由在し志願不満の人がいる、それは三不信によるからだと如実不如実の

修行を明瞭に判別されたのは、三不信より三信に基づかしめんが為であり、**真実方便の水際**は判然しているのだ。

西河は念佛に始終の両益を顯して諸行を排除し、念佛を勧められたのは**方便**の諸行に停滞せず**真実**の名号に帰せしめんが為である。

吉水は、和語灯に「念佛には独り立ちをせさせて助けさきぬなり、助けさす程の人は極楽の

辺地に生まる」等と化土の事を顯し、祖師は、明らかに御本典に三願を配当して、**真実**の教行信証の次に、化身土の巻を出されたのは、機執を募る十九、二十の願人を結果の上から捨てしめんが為の教示ではなかつたか。

道俗よ、以上の如く源は本願に發し、流れは大谷に及んでいるのに、何故**方便**を知らない

のだ。方便を知らなければ猶更真実は判らないのだ。

両方を比較してこそ、長短方円軽重真偽は判るのではないか。

第十八願しかいらないと頑張る人もいるが、十八願しか必要がないのなら、弥陀の本願に何を好んで三願を開設されよう。何を煩わしく釈尊も三經を開設せられよう。十八願しかいらないと言う人は謗法の重罪を侵しているのだぞ。

教える人も聞く人も、唯じや唯じやと有頂天に成っているが、何故唯になる迄求めないのだ。他力が無力になつていやせぬか。その儘がやりつ放しになつていやせぬか。底ぬけの悪性が宇宙の主にさしていただきのだもの、真剣に求めさせられなくて鮮やかに開発出来るものかい。